



イラスト・野畑桃花

突発的な痛み 精密検査して

雷鳴頭痛

ピカッと光って、ドド、ドーン。雷だ。「いよいよ、シーズン到来。これで旨い鰯が食べられる」とは、ノー天気すぎる。もしも、頭に雷でも落ちたらどうする。

47歳のY子さん。トイレで頑張っていたら、頭がガンガン痛くなってきた。痛みは、後ろ頭から頭全体に広がった。「まるで、頭に雷が落ちたみたい。ひどかった」と興奮している。が、半日経った今は、ほとんど痛みはない。症状と経過からみて、「雷鳴頭痛」ではなからうか。もちろん、放っておいてはいけない頭痛だ。いきなり頭を殴られたような、突発の頭痛である。1分とは言わずに、痛みはピークに達したと

いう。経験したことの無い頭痛だ。となれば、Y子さん。それこそ、我ら脳外科医者の出番だ。頭の中に、とんでもない病気ができたのかもしれない。ワッシーのようなボンクラ医者の脳裏にも、くも膜下出血、解離性動脈瘤、脳出血、脳腫瘍からの出血、静脈洞血栓症など、コワイ頭の病気のあれこれが浮かんでくる。

中でも多いのは、くも膜下出血やその他の原因で起きる頭の中の出血である。だが、Yさんの頭のCT（コンピュータ断層撮影）の検査でも、MRI（磁気共鳴画像装置）でも、頭の中に出血は見付からない。MRA（磁気共鳴血管画像）でも、脳動脈瘤やその他の血管の異常は写らないのだ。他にも、頭の中には頭痛を起す原因はない。となれば、Yさんの頭痛は、「死ぬの、生きるの」というようなものではなさそうだ。原因の特定できない「一次性雷鳴頭痛」ということか。

だが、ドラマでも、真犯人が分かるのは最後と決まっている。頭の精密検査を繰り返す。しごとく経過をみていく。と、やっと、頭痛の原因が分かっていくとどういふこともある。という話は次回にでも。

（石黒修三 いしぐろクリニック

・脳神経外科専門医、金沢市在住、射水市出身）